

平成27年 2月 27日

学位（博士・言語教育学）申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉 氏名 劉 笑倩（リュウ ショウセイ） 学生番号 OD502

〈論文題名〉 視点の違いによる次元形容詞の使い分け
－「大きい・小さい」「広い・狭い」「高い・低い」「太い・細い」
に関する考察－

審査委員

主査 外国語学部教授 遠藤 裕子



副査 外国語学部教授 石川 守



副査 外国語学部教授 阿久津 智



視点による次元形容詞の使い分け

ー 「大きい・小さい」「広い・狭い」「高い・低い」「太い・細い」に関する考察 ー

A study on the ways of using dimensional adjectives with viewpoints

: Focusing on *ookii, tiisai* and *hiroi, semai* and *takai, hikui* and *hutoi, hosoi*

I. 論文の主旨

本研究は、日本語において空間の量を表す基本的な形容詞のうち、類似点のある2対の形容詞を同一の対象に使用する場合について取り上げ、その使用状況と使い分けを論じたものである。

先行研究を踏まえ、①言語主体の立脚点、②言語主体から見える対象の範囲（「場」）、③言語主体が注目する対象の部分と特性、④言語主体が対象をどの程度主体的／客体的に解釈するか、の4点を「視点」の要素として抽出し、コーパスなどにおける実際の使用例を分析した。「大きい・小さい」「広い・狭い」「高い・低い」「太い・細い」4対による3組の形容詞が計16の名詞を修飾する場合について、「視点」①②③④との関連から使い分けの様相をまとめ、「実際の把握」と「概念的把握」に分けて、言語主体と対象物との関係を図で表した。また、「視点」による使い分けに加え、一部の対象語における2対4語の形容詞の使用の偏り等、運用面における特徴についても指摘した。

II. 論文の構成

本論文の構成は、次の通りである。

序章

0.1 研究の目的、対象及び方法

0.2 本論文の構成

第一章 次元形容詞および視点に関する先行研究

1.1 次元形容詞についての意味研究

1.1.1 『分類語彙表』(1964,2004)における形容詞の分類

1.1.2 国広(1968,1982)による次元形容詞の意義素と体系

1.1.3 久島(1993,2001)による《物》と《場所》に基づく空間的形容詞の研究

1.1.4 次元形容詞に関するその他の先行研究

1.1.4.1 服部(1968)：日英の次元形容詞の対照

1.1.4.2 西尾(1972)：形容詞の意味・用法に関する記述的研究

1.1.4.3 小出(2000)：次元形容詞の空間的用法と非空間的用法

1.1.4.4 国語辞典における次元形容詞の意味記述

1.2 視点と捉え方に関わる認知言語学の研究

1.2.1 視点、パースペクティブについて

1.2.2 スキャニングと主体の役割について

第二章 用例の収集および分析方法

2.1 分析対象語

2.2 用例の収集

2.3 用例の集計と分析方法

第三章 視点の違いによる次元形容詞の使い分け

3.1 「大きい・小さい」と「広い・狭い」の使い分け

3.1.1 先行研究における「大きい・小さい」と「広い・狭い」

3.1.2 「大きい・小さい」と「広い・狭い」の分析における視点

3.1.3 「大きい・小さい」と「広い・狭い」の使用状況と使い分け

3.1.3.1 「大きい・小さい」「広い・狭い」における集計結果

3.1.3.2 「大きい・小さい」「広い・狭い」における個別の用例分析

3.1.4 考察

3.1.4.1 実際の把握と概念的把握

3.1.4.2 まとめ

3.2 「大きい・小さい」と「高い・低い」の使い分け

3.2.1 先行研究における「大きい・小さい」と「高い・低い」

3.2.2 「大きい・小さい」と「高い・低い」における視点

3.2.3 「大きい・小さい」と「高い・低い」の使用状況と使い分け

3.2.3.1 「大きい・小さい」「高い・低い」における集計結果

3.2.3.2 「大きい・小さい」「高い・低い」における個別用例の分析

3.2.4 「形容詞 - 名詞」と「名詞 - ガノノ - 形容詞 - 名詞」について

3.2.5 考察

3.3 「広い・狭い」と「太い・細い」の使いわけ

3.3.1 先行研究における「広い・狭い」と「太い・細い」

3.3.2 「広い・狭い」と「太い・細い」における視点

3.3.3 主体性、およびトラジェクターとランドマーク

3.3.4 「広い・狭い」と「太い・細い」の使用状況と使い分け

3.3.4.1 「広い・狭い」「太い・細い」における集計結果

3.3.4.2 「広い・狭い」「太い・細い」における個別用例の分析

3.3.5 「太い～」と「細い～」の使用における非対称性

3.3.6 考察

第四章 結論

第五章 おわりに

5.1 まとめ

5.2 今後の課題

文献目録

III. 論文の概要

[序章]

序章では、本研究の目的、対象および研究方法と、本論文の構成について述べている。

研究の対象は、空間的な量を表す形容詞「大きい・小さい」「広い・狭い」「高い・低い」「太い・細い」であり、これらのうち類似点のある2種の形容詞が同一の名詞を修飾する場合を取り上げるとしている。被修飾名詞は「道、部屋、窓」など全体で16で、同一の言及対象について2対の次元形容詞が使用される場合の使い分けを、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)を主な言語資料として用いて分析し、「視点」との関連性から検証すると述べている。

[第一章 次元形容詞および視点に関する先行研究]

第一章は、2つの節から成る。

第1節では、空間的な量を表す形容詞の意味研究について述べている。

はじめに、現代日本語の語彙を整理・分類した『分類語彙表』について概説し、空間的な量を表すさまざまな形容詞のカテゴリーと扱いについてまとめている。次に、国広(1968, 1982)では、基本的な8対の次元形容詞を選び出し、その意義素を分析し記述したこと、また体系化を試みたことを解説し、意義素分析と体系化に際して1・2・3次元という軸とベクトルという概念を用いたのは新しい考え方であるが、5対の形容詞の体系図とその説明には問題点があることを、他の研究も引用して指摘している。全体としては、その後の研究に大きな影響を与えたとしている。

久島(1993, 2001)は、形容詞が修飾する対象を詳細に分析した結果として、《物》と《場所》という新たな概念を定義・提案したこと、特に《場所》については「機能」という概念を取り込んだことと《準場所》《地点》も明確に加えた点が、国広より深まっているとしている。しかし、久島の研究は、《物》や《場所》という「対象」を中心につくられた理論であり、対象をとらえる側(言語主体)に重きを置いていないこと、また、文や文章単位の用例がなく運用面での検証が不十分なことを、問題点として挙げている。

この他、英語との対照研究による日本語次元形容詞の意味研究をおこなった服部(1968)、大量の用例に基づく形容詞の意味記述をおこなった西尾(1972)の説について解説している。さらに、各次元形容詞の多義構造研究のうち本研究に関連のあるものとして、空間的用法と非空間的用法との関連性について論じた小出(2000)を取り上げまとめている。

これらの先行研究においては、その多くが1対の形容詞のうち「量的に大きい方」だけを詳細に分析しており、「量的に小さい方」について特別に言及することはしていない。しかし、対をなす形容詞の両方が同じように使用されるかどうかは明らかになっておらず、先行研究ではその点で不十分であることを問題点として指摘している。

第2節では、視点に関わる認知言語学的アプローチについて述べている。

「視点」という語は、分野によって解釈・定義がさまざまである。認知心理学の立場では、宮崎・上野(1985)が、「どこから見るか」「どこを見るか」の2つの意味が密接な関係があるとした上で、「どこから」の「どこ」に視点という語を使用していると述べている。また、動的視点と静的視点という概念についても本研究につながる考え方として言及している。次に、松木(1992)の説を受けた本多(2005)は、認知言語学の立場から「視点現象」という概念を提案し5つの要素を設定したと述べている。それは、「視点人物(見る主体)、注視点(見られる客体)、視座(見る場所)、視野(見える範囲)、見え(見える様子)」である。最後に、概念化者(観察者)の役割に焦点を当てたラネカーの説をまとめている。これは、視点(立脚点と視線の向き)だけでなく、ある事物をどの程度主体的あるいは客体的に解釈するかという要素を含めたパースペクティブという概念が言語表現に存在するというものである。

続いて、パースペクティブと主体の役割についてラネカーの説を紹介し、山梨(2000)によるスキヤニングと視線の移動、ラネカーのスキヤニングについて述べている。ラネカーの主張するスキヤニングとは、外界認知において2つの事態を関連づけていくプロセスであるとまとめている。

[第二章 用例の収集および分析方法]

第二章は、3つの節から成る。

第1節では、4対3組の次元形容詞が研究対象として妥当であることを、先行研究等に基づいて説明している。また、16の名詞についても同様に説明を加えている。

第2節では、分析のための用例として使用した、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)について、その特徴などを解説している。また、用例の補足資料として検索サイトYahoo!を使用したと述べている。

第3節では、まず、BCCWJの用例におけるデータの処理について説明している。次に、第三章で使用数を数える際の基準と関連事項について具体的に解説している。

[第三章 視点の違いによる次元形容詞の使い分け]

第三章は、3つの節から成る。

分析に当たっては、①言語主体の立脚点、②言語主体から見える対象の範囲(「場」、③言語主体が注目する対象の部分と特性、④言語主体が対象をどの程度主体的/客体的に解

積するか、の4点を「視点」の要素として進めている。また、3組の用例は、大きく「実際の把握」と「概念的把握」に分けられるとし、これと「視点」から使い分けを図で表している。実際の把握とは、言語主体が対象の前において視覚によって対象を把握する場合、概念的把握とは、言語主体が対象の前にいるかどうかに関わらず、持っている知識や経験などで対象を把握する場合としている。

第1節では、「大きい・小さい」「広い・狭い」が、(1)「湖」(2)「建物」(3)「部屋、窓」(4)「皿、紙、解答欄」を修飾する用例を取り上げ、グループごとに分析している。全体としては、言語主体が上述の「視点」によって、対象を一つのまとまった対象として把握する場合は、「大きい・小さい」の方を使用する傾向が見られ、観察対象を、動作を行う所あるいは動作の結果の存在する所として把握する場合は、「広い・狭い」の方を使用する傾向が見られとしている。そして、実際の把握については「大きい・小さい」を2タイプ、「広い・狭い」を3タイプの図で示している。また、「窓」に関しては、その特性上他の語と異なり、言語主体が心理的視線によって場の中に入り、窓の向こう側を目に入れながら窓を把握するという他の対象物と異なる用法が見られると指摘している。

第2節では、「大きい・小さい」「高い・低い」が、(1)「山、木、建物」(2)「車、人、テーブル」(3)「窓」を修飾する例を取り上げ、グループごとに分析している。全体としては、言語主体が「視点」によって、対象を一つのまとまった対象として把握する場合は、「大きい・小さい」の方を使用する傾向が見られ、対象を一つのまとまった対象として把握しかつ対象の下端から上端までの距離に注目する場合、あるいは位置に注目する場合は、「高い・低い」を使用する傾向が見られるとまとめている。「窓」に関しては、やや異なる用法として、向こう側(の上方)を見るために必要とされる所として把握する場合が見られると述べている。そして、実際の把握については、それぞれ1タイプの図で表している。また、対象名詞のうち、固定性と基準点(基準面)の存在という条件を満たさない「人、車」については、基本的には「名詞ーガ／ノー高い／低いー名詞」の形で使用されるが、実際の用例では「名詞ーガ／ノ」が省略される場合が見られることを指摘している。

第3節では、「広い・狭い」「太い・細い」が、(1)「道、橋、川」(2)「谷」を修飾する用例を取り上げ、グループごとに分析している。全体としては、言語主体が「視点」によって、対象の全体的な輪郭を把握する場合は「太い・細い」の方を使用する傾向が見られ、動作を行う所として把握する場合は「広い・狭い」の方を使用する傾向が見られると述べている。そして実際の把握については、「広い・狭い」を4タイプ、「太い・細い」を1タイプの図で表している。「広い・狭い」の用例については、対象に対する言語主体の解釈の主体性の度合いが高いとし、「道」などの用例では、主体が対象の場の中において、対象の軸にそって移

動しながら対象をトラジェクターとランドマークに分けスキヤニングによって把握する場合があるとしている。さらに運用上の特徴として、「道」に関しては「細い、狭い、広い」の用例は多く見られるのに対し「太い」は非常に少なく、「太い」と「細い」の使用が非対称であることを指摘している。

[第四章 結論]

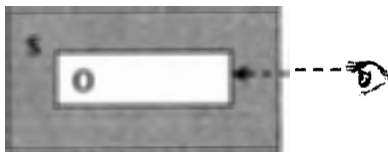
第四章では、本研究の結論を述べている。

3組の用例全体の共通点として、概念的把握では、知識や経験などに基づく心理的な視線で客観的に把握するタイプだけであるのに対し、実際の把握では、「視点」の違いにより複数の把握の仕方が見られるとしている。そして3組それぞれの結論を再述した上で、次のようにまとめている。

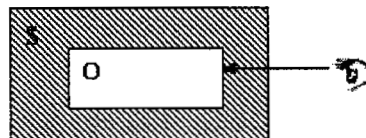
(1) 言語主体が「視点」によって、観察対象をどのように（「一つのまとまった対象」「動作を行う所」「動作の結果の存在する所」「向こう側を見るために必要とされる所」）把握するかが、次元形容詞の使用傾向に影響を与える。対象名詞の特徴は「言語主体が注目する対象の部分と特性」に反映する。

(2) 「広い・狭い」と「大きい・小さい」、「広い・狭い」と「太い・細い」の二組では、さらに、主体性の度合いから見た言語主体の「視点」が、観察対象の把握の仕方において重要な役割を果たす。「広い・狭い道」などの用例においては、言語主体が対象の軸にそって移動しながら、プロファイルされた対象をランドマークとトラジェクターに分けてスキヤニングによって把握する場合が見られる。

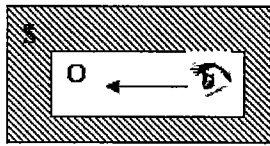
最後に、第三章で示した図を整理し、まとめている。図1は、「言語主体が対象の場の外にいて、心理的視線によって対象を一つのまとまったものとして把握する場合」（概念的把握）、図2は、「言語主体が対象の場の外にいて、実際の視線によって対象の全体的な形等を把握する場合」、図3は、「言語主体が何らかの動作によって対象の場の中に入り、その場を動作を行う所として把握する場合」、図4は、「広い・狭い窓」の実際の把握の一用法で、「言語主体が対象の場の外にいて、心理的視線によって場の中に入り、心理的視線と実際の視線を伸ばして対象の向こう側を目に入れながら対象を把握する場合」である。（他の図は、省略する。）



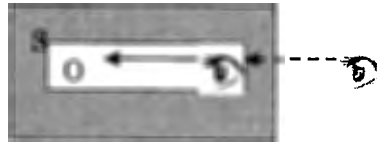
[図1]



[図2]



〔図3〕



〔図4〕

〔第五章 おわりに〕

第五章は、2つの節から成る。

第1節では、本論文の概要をまとめている。

第2節では、今後の課題と展望について述べている。本研究では、次元形容詞が連体修飾の形で使用された用例を扱っているが、形容詞が述語となる用例や副詞的用法なども分析することで、よりまとまった研究になると述べている。また、「太い」と「広い・狭い・細い」の使用に際立った差が見られた点等運用上の問題に関しては、さらに詳細な調査と議論の可能性のあることなどを挙げている。

IV. 論文の総合評価および結論

1. 論文提出から審査までの経緯

筆者は、2010年4月に本学言語教育研究科博士後期課程言語教育学専攻に入学した。外国語（日本語）検定試験に合格し、修了に必要な10単位以上を取得している。2013年9月に博士論文を提出の上、同課程を2014年3月に満期退学している。

完成論文発表会は、2013年7月20日に実施され、2013年7月26日の言語教育研究科委員会で受理が承認された。論文は2013年9月30日に提出され受理された。論文提出時の業績は、博士論文中間発表会、『拓殖大学言語教育研究年報』、及び学外の学会・学会誌での発表を含め、5本である。

第1回審査委員会を2014年3月26日に開催した。審査の結果は全員一致で合格であったが、若干の不十分な表現や誤記・誤植等があったため、これらの書き直しを行ったうえで博士論文として認めうるものと判定した。2014年9月16日、最終口述試験を行い、続いて第2回審査委員会を行って審議した結果、最終的に「合格」と判定した。

2. 審査所見

本論文は、類似点のある2対の次元形容詞を同一の対象に使用する場合について取り上げ、その使用状況と使い分けを論じたものである。以下、審査基準に照らして所見をまとめる。

まず、研究テーマ、研究方法、先行研究の把握は妥当であると認められる。先行研究においては、個々の次元形容詞の意味や次元形容詞の体系性等に注目したものが主であり、使い分けという観点から行われたまとまった研究は見られない。また、空間的な量を表すさまざ

まな語について理論的に論じた久島の研究においては、実例が挙げられておらず、言語主体と観察対象との関係がどのような様相を呈しているのか必ずしも明らかになっているとは言えない。

これらの先行研究の成果を踏まえ、新たな観点からテーマを設定し、コーパスの文脈を利用して形容詞の使い分けを分析したのは妥当である。また、言語主体と対象との関係を表すのに図式を用いた点も有効であると考えられる。用例分析を見ると、文脈から「視点」の要素である言語主体の立脚点や見える範囲などを読み取れる場合が多く、使い分けの分析と図式化につながっていると認められる。

先行研究に関しては、筆者の能動的理解による表現と直接引用とのバランスを整えることや、英語の文献についての記述を充実させることが望ましいが、全体としては上述したように適切であると考えられる。

次に、結論と考察について述べる。3組の形容詞の使用状況は、基本的には先行研究の説と大きく異なるものではないが、本研究では、対象の属性と次元形容詞の使い分けとの関連について、複数の語を取り上げグループごとに示した点が新しいと言える。

また、「広い・狭い」の分析においては、主体性の度合いを要素に含め、さらに「広い・狭い」「太い・細い」の分析においては、スキヤニングとランドマーク、トラジェクターという概念を取り込んだのも独創的な点である。これらの提案は、特に「窓」「道」などの用例の実際の把握において有効であると認められる。3組の形容詞のうち、「広い・狭い」「大きい・小さい」と「広い・狭い」「太い・細い」において多様な用法があることを、本研究は明らかにしている。これは、次元形容詞の体系性を追究する研究ではむしろ捨象されていた「広い・狭い」の用法の範囲の広さを示したものであり、注目される。

次元形容詞の使い分けについて、言語主体と対象との関係に注目し、筆者独自の枠組みである「視点」を設定した点や関係を図式化した点は意欲的であり、実際の使用例についても丁寧に分析して使い分けを分類・整理し、示している。さらに、「広い、狭い、細い」と「太い」の使用の非対称性など、運用面での新たな指摘も行っており、日本語教育への応用という観点からも評価できる。

課題を挙げるならば、用例として取り上げた形式の範囲がやや小さい点や、また、理論面でさらに洗練される余地がある点が考えられる。しかし、本研究が完結したものであることに変わりはなく、今後の発展的取り組みに期待したい。

以上に示されるように、本論文は、研究テーマ、先行研究・調査などの情報収集、研究方法のいずれにおいても適切・妥当なものであり、論旨も妥当なものである。論文の構成、言語表現、体裁などについても、問題はない。本論文は研究内容に独創性を有するものであり、当該分野の研究に幾ばくかの貢献をなすものと認められる。

学位申請者は、将来、言語教育の専門家として高等教育機関で活躍していく能力と学識を

持つものと認められる。

3. 審査委員会結論

以上により、本審査委員会は、慎重・厳重な審査の結果、総合的に判断し、3委員が一致して、学位申請者に対し、学位「博士（言語教育学）」を授与することに同意するものである。